



んな施設が八百津にもあるといいね。」



巨大なアウトレットPotomac Mills Mallで食事とShoppingを楽しんだあと、夜のジャパンナイトパーティ会場へ。教会として使われている施設である。室内の飾りつけをし、テーブルを配置する。テーブルクロスをかけ、ディナー会場の準備をてきばきとこなす。女子はあらかじめの準備ができると浴衣の着付けへ。女子が着付けをしている間も男子はよく動き、テーブル上には、ふわりと浮かぶ風船もつけられた。「さあ！Welcome!」午後6時には、60名をこすホストファミリーたちが集まりいよいよ開会。健琉君の元気のよい司会で始まる。団長としての私のスピーチは、ウエルカム時の感謝から始まり、ワシントンDCの美しさとアメリカンスピリッツを感じたことを中心に英作文したものを、流暢な？英語で伝えた(伝わったような気がする。)。食事のあと、習字・福笑い・じゃんけんゲームと折り紙のコーナーに分かれ、グループごとに交代しながら楽しんでもらった。生徒たちは、ここは出番だと一生懸命に英語で交流しようと

頑張っていた。ホストファミリーの人もよく心得ておられ、一緒になって遊んだり熱心に筆を運んだりしてくださったので、子どもたちも教えがいがあったのではないと思う。会の終わりに、練習してきた「生きている証」の合唱。西野さんのピアノ伴奏も美しく、気持ちよく歌いきり大きな歓声と拍手があった。そのあと盆踊りをみんなで踊り、パーティは大成功だった。また、浴衣姿がとても可愛らしく好評であった。



## 6. 眠らない町ニューヨークへ



ワシントン最終日の朝は、ホストファミリーとお別れの時間。涙を流してお別れをしている生徒もいた。6泊もの時間を受け入れてくださったホストファミリーのみなさんに大きな感謝。土日2日間は、それぞれのファミリーと一緒に過ごした。体験内容もさまざまであり、生徒たちにとってこの2日間は大きな

山場であったが、お別れの様子を見ていると、日本語を話せない状況の中でもうまく自分の気持ちを表現できたことが伝わってくる。ホームステイ中に誕生日となり、複数のファミリーから祝福を受け最高の思い出ができた子もいる。ワシントン郊外のゆとりある敷地のゆったりとした家庭。家族の時間を大切に考えておられるホストファミリーとの時間は、生徒たちにとって最高のプレゼントになったに違いない。

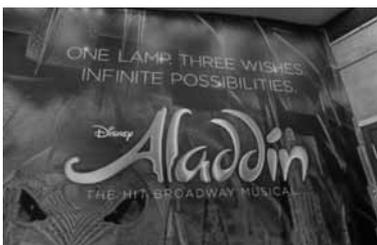
美術館のような外観のワシントン駅からは列車での旅。3時間半。車窓からはワシントンとは違うアメリカの普通の町も見え、スポットを浴びている町だけではないことを確認することができた。列車の中では、2日間日本語を喋っていなかったせいか、いつも以上に楽しい会話が続いていた。



ニューヨーク駅からバスに乗り換えて中心部へと市内観光。ニューヨーク勤務の中澤さんのガイドは、実にテンポがよい。特徴ある建物が途切れることなく続いているからである。右を見たり左を見たり、高層ビルを見上げたり人の行き来を観察したり…時々見えるエンパイアステートビルの先端。最終日はあそこに昇るのだ。



メトロポリタン美術館では、1時間余りでは到底回り切れないほどの名画や彫刻。エジプト展も開催されていた。ゴッホの自画像の周りには人だかりが。見学後は、宿泊地のホテル Pennsylvaniaへ。エンパイアステートビルの近く、そしてMadison Square Gardenの目の前である。階ごとに多くの部屋があり迷路のよう。古くからある調度品をととても大切にしており、部屋にも歴史が刻まれていた。古くからのバスタブであったり古いドアが何度か塗りなおされていたり。ホテルの宿泊に期待を膨らませていた生徒たちは、ほの暗い感じがあり「お化けが出そう…！」と騒いではいたが、「きっと有名人が泊まったホテルだよ。」と想像力を豊かに働かせて楽しむようアドバイスする。



食事後にはBroadwayにてミュージカル「アラジン」の鑑賞。満席の劇場。3階席の中ほどであったが、急こう配の客席のためか、ステージから離れていてもキャストの熱気が伝わってきて、華やかな雰囲気と洗練されたショーを楽しむことができた。終了してからホテルに着くまでが大変。すごい人の波である。生徒たちは、上にも横にも大きい人たちの中で見え隠れする。最後尾につき、声をかけながらのホテル到着であった。

## 7. 平和の意味を問う

### (1) Holocaust記念博物館

添乗員の泉夕子さん談「今年の子どもたちは、本当に勉強熱心！誰もが時間いっぱい使って真剣に見学していました。時間が足りないって言っていた子もいましたよ。」目のあたりにする惨劇の事実。アウシュビッツのガ